
うさぎ狩り

奈留木兆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うさぎ狩り

【Nコード】

N1953Q

【作者名】

奈留木兆

【あらすじ】

あのこはまっしろなワンピースを着ていた。赤でも黒でもない白のワンピースを。この島で着ていた。《うさぎ狩り“開始”》

第一羽：女王の合図により開始。

ひとつの大型のスクリーン。それを囲むように置かれている、たくさんの小型のスクリーン。

それらのスクリーンからは機械独特の音がしない。静かに画像を流し続けるだけ。

静かなスクリーンを見ているのは、ドレスやタキシードを着込んだ高等階級の人々。人々の顔には隠すようにと、仮面を着けている。口元は下品な笑みを浮かべて。

彼らはこの世に満足をしていない。

この世に彼らを満たせる快樂はあるのだろうか……。

大型スクリーンには深い青に囲まれている緑色の島が映されていた。

『俺はどうして……』

たくさんの小型スクリーンのうちの一つに映るのは、一人の青年。黒髪で、どこにでも居る、ただの青年が、深い森林の中を彷徨うように歩いていた。

彼の服装は、どこの学校にも存在している学生制服を着用していた。靴は履きなれたスニーカー。

その青年を嘲笑うかのように、コツコツとヒールを鳴らしながら、金色に縁取られた仮面をつけた女が優雅に現れた。人々は、その女を見た。

「今回もうさぎ狩りに集まって頂き喜び申し上げます。皆様がお連れしたアリスたちのだれがうちの『白いうさぎ』を狩るのか。楽し

く見物をいたしましょう。さあ、我々の欲を満たすための遊戯を」

美しく、辺りに響くような冷たい声。声とは裏腹に、口元は歪に歪まれている、口角の上がった笑みを浮かべて。

右手にある、この遊戯のオーナーである証、人の血を吸ったかのような赤く鈍く光る禍々しくも美しいダイヤモンドの指輪を掲げた。人々は右手にある赤いワインを掲げて。

第二羽…ただのうさぎが起きた。

そうだ。

俺は昨日の学校帰りに、黒帽子、黒いサングラス、黒いスーツ、黒いネクタイ、黒い革靴を履いた人に菓を嗅がせられたんだ。そして、俺はこの日本とは言えないような、きれいな緑にあふれる森林に転がるように寝ていた。

右や左を見ても全てが緑。

上を見たとしても、青と薄い白が見えるだけ。

下にはぬかるんでいる茶色い地面。

側に俺と同じように転がされていたカバンが一つ。その中には、俺の携帯（もちろん圏外）に、数種類の教科書に筆箱。

そして、何故か拳銃が一つ。

日本は銃刀法があって、拳銃なんて一般市民である俺が持てるわけがない。

なのに、何で俺のカバンにコレが？そして、この森はどこ？もんもんと一人で考えていても、何も起きない。

ここにいるのは、俺一人だけなのかもしれない。

そんな錯覚を覚えさせてしまうほど、静かな場所だ。だけど、実際は俺の近くには物音を立てない鳥が一羽いた。その鳥が俺を品定めしてるかのように見ていることに俺は気付くことはなかった。そして、俺のことを見ているのはそれだけじゃなく、他にもいたことにも。

第三羽…うさぎと金色が出会った。

俺はどのくらい歩いたのか、同じ道を歩いていたのか、と疑問になり始めた時、俺はまだ森の中にいた。

ただでさえ、この木々によって太陽が遮ぎられており暗いというのに、太陽が沈みかけている中、更に暗くなっていた。

そして、潮の匂いがする。他にも、嗅いだことのない、嫌悪感を感じさせるような匂いが漂い始めている。俺の肌は鳥肌が立ち、これはただ寒いだけだと思いながら、歩みを止めない。

この嫌悪感の正体は、俺は知っていたのかもしれない。
人の本性として。

そんな俺の思考を止めるような音が耳に響いた。

「・・・だれだ!？」

俺の声より少し低めの音で、俺に小さい銃の口を俺に向けている人がいた。

見たとき、金色の何かと思ったけど、ただの金髪で少し長髪の人。年齢は俺と変わらないか、少し年上のオニーサンぽい。俗に言う、不良だ。

「・・・はー。あんたはさっきのやつより、話が出来そうだな・・・」

座れ。と、銃口を俺に向けたまま顎で指示を出す。

落ち着いているように見えるけど、俺はただこの現状にまだ追いつけていないだけ。いつもの俺ならきつと、無我夢中になってこの男から逃げている。

「あんた落ち着いているってことは、このゲームは初めてという訳じゃないようだな? 前回の生きてるってことは、かなりの手練れか策士か・・・」

俺には分からないようなことを言っているオニーサンは、銃口を下げずに俺を品定めをしながら見ていた。

オニーサンは俺が何も言わないので、勝手に自己完結をしては、怪しく笑った。それと同時に俺には聞き馴れない、いや平和な日本国民は誰だって聞き馴れるはずのない銃声が聞こえた。ゲーセンに行くと、発砲音はよく聞くがアレとは違う重い音だった。

その発砲音の先は分からないが、弾は俺の頭があった場所を狙っていた。弾を避ける術を持つはずのない俺が避けたということは、誰かによって俺の頭を無理矢理移動させたということ。つまり、俺の体は俺を押し倒しているオニーサンのおかげで生き残れたということ。

「・・・ツチ」

小さな舌打ちが聞こえたと思うと、オニーサンは音がした方へ銃を向けて撃った。

なんの躊躇いもなく。ただ生きるために引き金を引いた。

オニーサンの撃った弾は、ただ草むらを撃つだけで、あの舌打ちをした以外何も聞こえなかった。

悲しく地面をえぐる音が響く。

「さっきので、他のやつに知られたかもな・・・。あんた、取り乱したりしないから手練れだと思っていたけどよ、初めてだな？ それにしても、少しはこのルールを知っていてもいい気がするが・・・そんなことはいいか。でだ、あんたの名前は？」

「・・・」

「・・・あんた日本人だよな？ 口が利けねえってか？」

「・・・けい、た」

「ケイ、タ？ まさかケイが苗字でタが名前か？」

「ちがつ・・・ケイタ。啓太」

久しぶりに声を出したために擦れてしまい、上手く自分の名前が言えなかった。3回目で自分の名前“啓太”を上手く言えた。

オニーサンが何を話しているのかは分からないけど、俺にはオニーサンが悪い人には見えていなかった。本当はここで出会えた初めての人間だからなのか、オニーサンに対して安心感を抱いていたん

だ。

「啓太か。よし、ケイ。今から安全な場所って言っても、ここに安全な場所なんて無いが……狙われるよりかはましだろ。ほら行くぞ」

第四羽…うさぎは茶色の寢床を探す。

さっさと歩けと言わんばかりに、俺の手を引いて先を歩いて行く。
あの嫌悪感のある匂いとは逆方向に。

「どうした？ そっちになにか居たのか？」

「気のせいかも・・・」

「言ってみろって。万が一のことを考えてな？」

その場所から、視線を外しオニーサンへと向いた。

俺の口を開くのを待っていたオニーサンは催促する目で見てくる。
だけど、俺の口は開かなかった。

数秒後、オニーサンは俺に興味を無くしたのか、掴んでいた手を離し、さっきのように歩いて行った。その後を、俺は慌ててついていくが、この歩き慣れていない場所のためかオニーサンと俺との距離は広がっていく。

オニーサンは俺の居る場所が分かっているのか、後ろを見ずに止まって俺を待ってくれた。

「・・・この辺りにポイントが・・・」

景色は変わらず、ただの緑のところでガサガサと探していた。何かを。

オニーサンの行動を見ながら、太い幹のそこへ腰をかけた。

「おいおい。ケイも座ってないで、手伝えよ。これが無いと、これから生きていけねえんだからな」

そういつては手を草の中に突っ込んでガサガサし始めた。俺もオニーサンに習って、草むらの中に手を入れた。

今更だが、俺は何を探せば？ と疑問に思い、オニーサンに話しかけようとした。

俺は後ろを振り向いた。

そのオニーサンは、いなくなっていた。

ささあぁ。と風が緑を揺らし、俺の髪も揺らした。

「ケイ！そこで立ってないで、こっちに来てい！今から、ここのルールとか教えてやるから」

草むらからオニーサンの顔がひょっこりと現れた。表情は深刻で眉間にしわを寄せたものと違って、陽気で何かイタズラをしでかそうとしている顔だった。

オニーサンの顔が引っ込んだところに、四角い穴が不自然にも開いていた。その穴からオニーサンの陽気な鼻歌が少し漏れてきた。曲は分からないけど、なんか聞いていると少し古くさかった。

中に入るとゆらゆら揺れる蝋燭の光がオニーサンと茶色い壁と天井を照らしていた。

「やっと来たか。ま、辛気臭い話になるから上手いもん食いながらにしようぜ。上手いって言っても、ケイがいつも食べてるやつよりかは劣っているけど」

ホイと緩い半円を描いて俺の元へ投げ渡された、カロリーメイトぽいスティック状の食べ物。その食べ物を見た途端、そういえば今まで何も食べてないし飲んでなかったことに気が付いた。手元にあるカロリーメイトぽい物を見下ろすと、喉が異常に乾いてくる。

「・・・たしか、水は・・・と、あった、あった。ほい、これもな・・・腹はきつと壊れないはずだから」

「・・・ありが、と」

「・・・どーいたしました。でだ、まずここの土地について話すな。

ここは世界各国から切り離された孤島で、広さは東京ドーム2〜3個分と・・・結構な広さなんだよ。そして、本題。この孤島で何をしているのか。分かるか？ヒントは武器を使用できる、ということ」

オニーサンの問いに、ただ首を傾げるしかない。

オニーサンの話では、ここは島と武器を使用する人がいるとしか分からない。この島で何をしているのかということは分からない。

閉鎖的な島、そして俺が持っていた銃と関連されるもの。閉鎖的な島、銃。閉鎖的な島、じゅう。へいさてきなしま、じゅう。

「・・・だよー。まず、ここで行われているのは『サバイバルゲーム』。このサバイバルゲームは、ケイが知っているようなものじゃなくて・・・あれだな。一種の戦争だ。選ばれたやつと犯罪者たちが殺しあう、マジ死のサバイバルゲームだ。って、変な顔すんなよ。言っとくけどな、お前もここに居る限りは・・・人を殺すことになるんだからな？」

「・・・ひと、をクロス・・・」

「ああ。今までにケイみたいなのやつに出会ったけど、お前みたいな本当に何も知らされてないのを見るのは初めてだな。とりあえず、今日は寝ろ。そしたら、明日は嫌でも歩かせてやるから」

「分かった。・・・」

「なんだよ？顔に何かついてたか？」

オニーサンは顔を指して聞いてくる、俺は首を横に振って答えた。なんだよつと促してくるが、俺はそれを見無視して眠りに着くために横になった。

無視かよ、と突っ込みを受けるが、それは俺の耳から脳に届くまでにいたらなかった。

俺の脳はオニーサンが俺を撃たないことについて考えないように避けていた。

知ると恐ろしいのだと感じていたに違いない。

「啓太くん、君はいつまで生きれるかな？」

「ムリだろ。あの男は仲間殺しのうさぎだぞ」

「そうかな？意外とあの男は啓太くんを守るかも」

「・・・ないな。おい、さっさと戻るぞ。あいつが心配だ」

「なによー。あの子はこのイカれたゲームに参加してから負け知らずなんだから、簡単には死なないわよ」

2人の様子を木の影から見ていた、男と女。

黒い影に隠れていて、何も見えないところにいた。ただ声だけが小さく聞こえた。

女が口を閉ざすと、そこから何も音がしなくなった。彼らはどこかに去ったようだ。

第五羽…うさぎは追われ、狩られる。

寝心地が悪い。

まず思ったのがそれだ。俺が転がっている場所は、土臭い場所だった。

目を覚まし、上体を起こすとオニーサンがいなくなっていた。

「―――よる、うさぎ―――。アリス―――、―――な。うさぎの―――減る」

上から何かが聞こえた。オニーサンの声ではないのは明らかだ。

その声は女の子特有の高い声だった。

ゆっくりと穴から顔を出すと……。

そこには、白い服に白い靴を黒髪の子がいた。女の子と言えるのは、俺の知っている女の子たちと同じくらいに見えたからだ。

ただ、異質なのは白い色というところだ。何も穢れの知らない色。これから染まろうとする色。

この異質に気づいた時には、手遅れだった。

「アリスによる、うさぎ狩り。アリスよ、うさぎに食べられるな。うさぎの共喰いで褒美が減る……あなたはうさぎ。すべてを食べることが許されている」

「え……どういふこと、だ？」

俺の目を見て言葉をつむいでいく彼女。

「聞く相手が違いますよ。あなたが聞く相手は……」

彼女が指すところを見ると、木々の葉が揺れているだけ。

「何もないじゃ……どこに行ったんだ？」

彼女のほうへ振り向くと、誰も何もいなくなっていた。彼女がそこに存在をしていたことさえ無いかのように。

「お、もう起きていたのか。なんだ？ 変なものを見てしまった、という顔は？」

彼女が指差した場所からオニーサンが怪訝な顔をしながら現れた。

「なんでもない。どこに？」

「ちよつとな。それよりも、説明をしたいことがあるから、いいか？」

人差し指で俺が寝ていた場所を指す。

そこで何を話すのだろうか。

「でだ、昨日の続きなんだが・・・このサバイバルゲームにはチームがある。そのチームは2つ。『うさぎ』と『アリス』だ」

「アリスによる、うさぎ狩り。アリスよ、うさぎに食べられるな。うさぎの共喰いで褒美が減る・・・」

「・・・どうして、そのことを知っている！？ケイ、本当にこのゲームは初めてか？」

「さっき、上であつたんだよ！それを言っている女の子に！」

「その女はどんなやつだ！？」

「・・・全体的に白かった」

「そうか」

肩を落とし、いかにも落ち込んでいる姿に俺は疑問に思ったが口を出せるような空気じゃなかった。なぜ、そこまで落ち込むのか。あの言葉に何が隠されているのか。

「ねえ、その人に聞けて・・・言われた」

「何を？」

「その・・・アリスによる、うさぎ狩り。アリスよ・・・っていうやつの意味」

オニーサンは数分俺を見ると、話す気になったのか重そうに口を開いた。

「その言葉通りだ。アリスはうさぎだけを狩ることができる。うさぎはアリスとうさぎを食べること・・・殺すことができる。そして、うさぎは裏で裁かれた裏の人間・・・長期懲役の犯罪者で構成されている。アリスはこのゲームの主催者たちの駒だ」

「・・・」

「うさぎはここで人を殺すたびに懲役期限が短くなっていく。アリ

スは殺すたびに金がもらえられる。俺が知っているのはそこまでだ」

「・・・おれ、うさぎって言われた」

「はあ？お前みたいなのがか？まあ気にするな。アリスさえ殺さなかったら、最低命は失わねえから」

このサバイバルゲームが終わる、そのときまでここにいればいいのか？そうしたら、俺は生きてここから出てくれる……。うさぎなのか、アリスなのかは気にせずに、ここにいれば……。

バン！

突然上から響いた。

「・・・っ」

オニーサンに押され、壁にぶつかった。俺の場所は出入り口から離れた壁際へと移動させられた。

「うち・・・つけられていたか」

オニーサンは銃を取り出し、構え、出入り口の扉を少し開ける。すると、引き金をすぐにひいた。

上からは人が倒れる音が微かに聞こえた。

「ケイ、これがここで生きていくための術だ。覚えておけ」

「・・・人殺し」

「ああ、人殺しさ。けどな、俺が殺さなかったらお前と俺は死んでいた。それでいいのか？生きていたくないのか？」

出て行くオニーサンをただ見送る俺。

人殺しについて受け入れることのできない俺。

どうして俺はここで銃を持って、震えているのか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1953q/>

うさぎ狩り

2011年1月18日13時55分発行